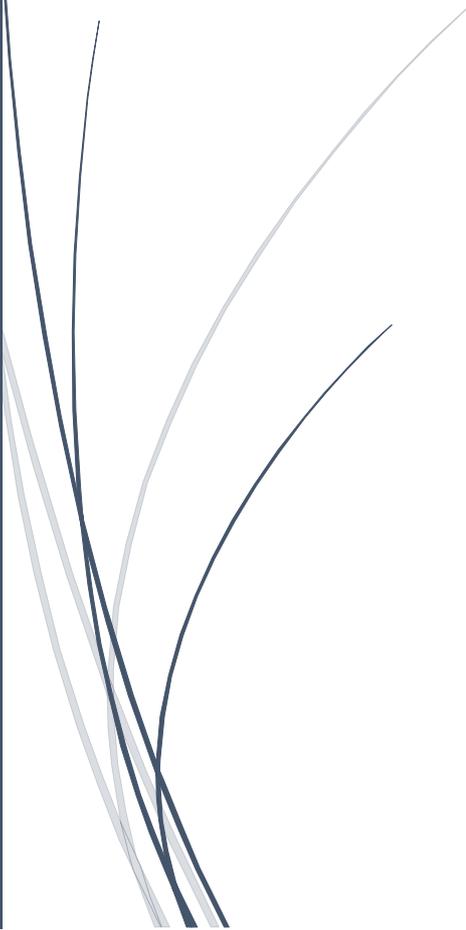




# 変わらない日々



金沢 桃夏

## 変わらない日々

「こんにちは、はじめましてだったか？」

一人の病院服を着た青年が目の前にいた。見る限りおよそ18、19くらいだろう。光に当たるたびに輝く緑の瞳を此方にまっすぐ向けて、同じ緑色をしたショートカットのくせ毛が小さく揺れていた。

「……嗚呼、はじめましてだ。」

彼に対して肯定の意の言葉のついでに小さく頷くと、彼は笑みを湛えながら手を差し伸べてきた。もしや握手だろうか。とその手を握ると、彼はしっかり握り返してきた。

「俺の名前は、アン・ニーージャ。君の名前は？」

「……ない。強いて言うならスタッフだ。」

「スタッフ君か、よろしく頼もう。」

それじゃあ、と彼は軽く手を挙げると散歩の続きに行ってしまった。そんな彼の背中を見送っては、これで何回目だろうか。とため息をついてしまう。

彼が出てきた部屋……病室に入ってはあまりにも殺風景な部屋に眉間にしわを寄せる。最初は彼の好きなもの、落ち着くものを置いて気を紛らわせてやろうとしたが、彼は朝、布団の中から出てきては毎回主治医か、別のスタッフ含める俺と同じ会話をする。ここにきてどれくらい経っているのか、と彼が来た頃を思い出す。

『此処は、いったいどこだ？』

一人の患者が目覚める。と言っても彼は既に一昨日からここに入院している患者だが。彼は目が見えないものの、異なる雰囲気気付いたのか眉間に皺を寄せている。バイタルチェックをした上で問題ないと判断しては彼へ説明しに向かう。

『此処は病室だ。御前の名前は言えるか？』

『……覚えていない。それからなぜ俺は病院に……？』

『覚えていないか。まあ、そんな気はしていた。それから、御前は病気に罹っている。その病気が珍しく、普通の病院では治せないから此処に移された。此処までは理解したか。』

『あ、嗚呼。それは分かった。じゃあ、俺は何の病気を患っているんだ？』

『【毎日】記憶をなくす病気だ。昨日も説明しているが、覚えていないだろう。』

ちらりと、彼のベッドの枕元を見やる。そこにはカルテが置かれており、彼のプロフィールが書かれている。彼の名前、彼の出身地、彼の身長体重、よく食べているもの、彼の病気について、ここに来た日付などなど……このカルテがあれば、説明をしに行く必要がないのでは？と思いつつも、彼へカルテの存在を告げる。

『もっと詳しいことを知りたいならカルテを見れば良い。点字も付けてあるから盲目の御

前でも読める筈だ。』

そう、てきぱきと伝えることを伝えては彼の様子を見守る。本来ならばカルテに全て書き込んだものを勝手に見るように促しても良いが、それだと混乱を招く恐れが高く、その上、不安を煽るだけだと判断されては、ひとまず口頭で説明することが取り決められた。落ち着いている様子の彼がカルテを確認し始めたのを見ては、これ以上の説明は不要だと病室から出て行く。

……以上を今も繰り返している。これだけ繰り返せば少しは既視感が残らないのだろうか、と思うが仕方がない。覚えられないこの状況が、彼の病気なのだから。

「……あ、伝え忘れてることあった。まあ、いいか。」

この一年、毎日繰り返し話していると時々「ここは昨日話したな。」と彼の病気の内容を忘れて飛ばしてしまうことがある。今日も一つ伝え忘れていた項目に気づくが、今までの彼の行動を見る限り、あの項目については、伝え忘れていたとしても支障はないだろう。と判断する。

「此处が最後の病室か。」

彼は最後の病室の前で立っていた。一年も経てば既に慣れて周りの新しい患者の軽い世話をしても良さそうだが、あいにく彼は毎日記憶喪失になる。つまりは、毎日『新人患者』としてここへ訪れるも同然なのだ。

そこですることはといえば、もっぱら病院の探索だ。彼は少しした事故で盲目を抱えており、どこに何があるかを人一倍注意して覚えていかないと、ふとした時に事故に遭いかねない。そこでカルテをチェックして明日には忘れる記憶だとしても、確認せずにはいられなかった。

手探りで目の前の病室の扉を確認すると、冷たく硬い感覚が指先に当たり、それが病室の数字だと分かった。

【064】

「此处、結構な人が入院しているんだな。」

彼はそう、ポツリとつぶやいては扉をノックする。彼が今まで探索中に挨拶した人々はそれなりに良い人が多く、皆が口を揃えて「今日も初めまして。」といった挨拶をかけてくれるのも助かっていた。目の前の病室の人はどんな人なのだろうか、と想像をしていると不意に声がした。

「う、うう・・・ごほっ！ゴホ、げほっ！」

かなり、苦しそうな声が向こうからすることに気づいた彼は、慌てて鍵が開いていたその病

室へ飛び込む。

その病室が、スタッフ達、患者達の間で立ち入り禁止とされている病室だということを、記憶を持たない彼は当然知らないことだった。

「大丈夫か!？」

病室に飛び込むなり彼はそう呼びかける。人の気配がベッドの足元からして倒れていることを察しては転ばないように、とそちらへ駆け寄った。

「君、だれだ、よ。」

荒い呼吸をしながら呼びかけに答える声は、透き通った綺麗な声をしており、彼もその声には驚いた。

「アン・ニージャ。君の苦しそうな声がしたから勝手に入ってしまった。それについては、すまなかった。」

問いかけに答えては、倒れている人を手探りで支えながら抱き起こす。

「そ、う……ああ、もう良いよ。」

その人は彼の手を払うと一人で立ち上がった。盲目である彼は見えなかったが、短くも乱雑に伸びた黒髪はカラスの濡れた羽根のように美しく、頬や髪に張り付いていた。そして真っ白な肌はガラスのように繊細そうに見えた。姿も儂さを保ちつつ、どこことなく此方が怪我を負いそうな冷やかな雰囲気を感じていた。それほどに美少女にも見える男性の美貌を、盲目の彼は永遠に見ることは叶わない。それでも人のまとう雰囲気を敏感に感じとれる彼は、優艶だということは伝わったのだろう。目を少し大きく見開きながら闇の中の光を見つめた。

「ところで、なんでここに入ってきたの？ お優しい皆から教えて貰わなかったのかい？」  
見かけによらない低い声に、ぶっきらぼうな言葉を零す青年に気圧されることなく彼は言葉を紡いだ。

「嗚呼、医者と言うには一日しか記憶を持たないらしい。多分そのことを知らない人が伝え忘れていたんだろう。」

「ああ……此処に来て結構長く入院してる人の話は聞いていたけど、君のことだったのか。それから病気というより、もう一つ何かを持ってるんだろ？」

先ほどから目が合っていないことに気づいた青年はベッドに腰掛けながら、長い足を組んだ。

「嗚呼、よく分かったな。俺は目が見えないんだ。そうだな、光ならわかる程度だ。」

「それでさっきから目が合わなかったのか。……俺の名前はインセクト。病気はそうだな、触った方が伝わるか。少し失礼するよ。」

彼は説明しようと口を開くが、それより触れた方がいち早く理解できる。と気づいては彼の肩に触れる。そして手を引いては自らの左腕に沿わせた。その腕は妙に硬く、骨の様だっ

た。否、骨というのは語弊がある。確かに固いが、ある一種の皮膚を思わせるものだった。

「……硬い、皮膚？ いや、これはその……。」

それは彼にも分かったらしく、言うか言うまいかと迷いあぐねていた。その様子を見ていた青年は、彼が何を言いたいのかわかったらしく、目を細めて笑みを深くすると彼の耳元で囁いた。

「気味の悪い、まるで甲虫みたいな手触りだろ？ それは気のせいじゃない。手や脚が異形になる病気なんだ、俺。」

青年は呆然とする彼を見つめた。この気味の悪い異形の手と足、盲目の彼には気づけない、青年の背中から生える薄い羽はまるで羽虫、蚊や蠅を連想させる様な透明で薄く、とても弱々しかった。青年は異形になる病気といえば近からずも遠からずだが、正確には虫に近づく病気だ。青年が入院した頃は、皆優しく出迎えてくれたが、虫を連想させる鋭いカギ爪は意図せず怪我をさせ、人間から徐々に離れていく姿はやはり、見せたくなかったのだろう。青年のかかりつけであった医者も、青年を使われていない病室に閉じ込めた上、周りには『凶暴な人がいるから近づかない様に』と囁いたため、彼はずっと一人だった。

彼はその事実を聞かされて眉を顰める。そんなこと今まで聞かされていなかったからだ。否……聞かされていたとしても、彼自身は覚えられないのだから仕方ないのだ。だが、それでも今まで覚えられないとはいえ、一人の存在を無視し続けていたということになる。それは彼自身にとって何よりも辛いことだった。

「じゃあ、また明日くる。」

「は？」

「明日も来る。明後日も、しあさつても……毎日ここに来る。」

「……覚えられないんだろ。出来ない事を約束なんかしなくたって平気だよ、俺は。」

「それでも、俺は来る。なんとかして覚えるから、待っててくれないか。」

青年の手を手探りで掴んでは力強く呟く。彼には毎日毎日全て忘れてまっさらな、空っぽな記憶になってしまう病気を持っている。それでも彼は、今まで青年のことを認識しなかった事を詫びたかった。

「変わってんな……。じゃあ、バレない様に合図するよ。音が聞こえたら多分、君は気になって入ろうとするだろ。」

最後には根負けしたのか、苦笑まじりに青年はそう返した。もし来ることができなかったとしても彼自身そういう病気なのだから仕方ない、と諦める事ができる。そういう意味では、彼の病気に助けられていた。

少しの間、二人にとっては長い時間を話して過ごしていると、チャイムの音がした。何の音だろうか、と見上げる彼に青年は教えた。

「ああ、アレか。アレは点呼の時間を知らせるものだ。君もそろそろ帰らないとセンセイに怒られてしまうよ。」

「どうして点呼を取るんだ？」

「ああ……時々抜け出そうとする患者がいるから、それを防ぐためでもあるんだ。このことについては説明してもらわなかったのか？」

「教えてもらってはいたが、どの様に収集するのは聞いていなかったんだ。」

「なるほどな。……ほら、多分君の病室にセンセイが向かう頃じゃないかな、今なら間に合うよ。」

青年はそういうと彼の手を握ってドア前まで連れて行く。まだ少し戸惑いの残る彼は、青年を多少気にしながらも手探りで自室まで向かっていった。

どうにか自らの病室まで辿り着いた彼は何人かの先生からあれよこれよと聞かれたが、全て特に問題ないと判断されては、次の患者の病室へ向かっていった。一人残された彼は病室の中で横になる。彼には考えていることがあった。

「もし、寝なければ記憶を失わずに済むのでは？」

だが、それは既に前の彼が行っており、そしてその結果は診断書に書かれており、それは失敗だった。

頭の中では分かっているつもりでも口から出てこず、それでも口に出そうとしたが、次々に薄れていく様な感覚に襲われてしまい、気がつけば何もかもがわからなくなっていた。

その時に軽いパニックに陥った様子を見た医者達は話し合った結果、彼を必ず寝る前の水一杯に睡眠薬を混ぜて眠らせる事を、彼自身は知らないことだった。

どれくらい考えていたのだろうか、今は何時かわからないが、ウトウトと眠気が訪れる事で今は夜なのだと彼は知らされた。

「明日、明日……インセクト君、に……。」

夜もすっかり更けた頃、俺はこっそり部屋から抜け出して、彼の病室に忍び込んだ。見つければ、彼奴らから「気味が悪い」だの、「早く出ていけ」だのと、言われることはわかっていたから、必要以上に気をつけていた。

病室から出た理由は此奴が、あの病室に閉じ込められて以来の初めてのお客さんもとい、患者であり、興味が俄然湧いて、朝一番に会ってやろうと考えたからだった。

病室のドアを静かに開けると、ベッドの上にそいつは居た。すやすやと今のところ異常なく眠っており、『目覚めるまで此処に居てやろう。』とその寝顔を眺めた。身を丸くして、目を瞑り、だがどこことなく苦しそうな表情を浮かべる彼に眉を顰めた。そう言う顔を見たくは

なかった為、安心させるために頭を撫でてやると頬が濡れている事に気づいた。何故濡れているのか、とそれを拭いながら枕元のサイドテーブルを見遣ると飲まされたのであろうコップが置いてあった。ゴミ箱には見慣れたゴミがあった。

「これは……。」

そのゴミをゴミ箱から拾い上げる。そのゴミは錠剤の入っていたのだろうゴミだった。そのゴミは俺が『病気が悪化する直前』まで飲まされていた薬の袋と酷似していた。

翌日、彼の主治医は医者を数人ほど集めたかと思うと、彼の病室へ向かった。

「先生、何故私達も行かねばならないのです？」

「少しいつもと違った。もしかすると、の可能性もあるから君たちにも来てもらう。」

主治医の後ろを着いて行く医者たちは眉を顰めた。彼について詳しく、と言ってもカルテに書かれた情報くらいだが……を完全に把握しているのは主治医のみであり、他の医者たちにとっては一人の患者にすぎないからだ。

「待たせたね、アン・ニージャ君。それで、何かあったのか？」

「嗚呼、俺は毎日記憶喪失になる病気に罹っていたらしいな。」

「何故、それを……？ カルテを読んだ、訳ではなさそうだが……。」

主治医含める医師達は目を丸くした。勝手に診断書を読んだのかもしれないが、それに手はいつもと様子がおかしい。今まで彼は初めて知る情報に少し戸惑っている様子だったが、今は違う。まるで、初めから知っているかの様な雰囲気だった。

「それから、俺はその名前ではない。本名は鴨沢 壱弥 (カモザワ イチヤ) だ。俺に記憶はなかったそうだから、先生が仮の名をつけたと思うが……。」

その言葉で皆は察した。原因こそ不明だが、彼は完治したのだ。

「あ、ああ……そうか、そうか！ やっと治ったのか！ ああ、良かった……！」

主治医はそういうとアン・ニージャ改め、鴨沢壱弥の元へ駆け寄った。そして体に異常がない事に再び安堵し、彼の頭を撫でた。主治医である彼は常に彼の安否について気をかけており、治療についてもよく顔を出し、異常がないかを確認していた。そんな二人の喜ぶ様子を、後ろの医師達は眺めながら、小声で会話をした。

「これじゃあ、研究が台無しだ。」

「殺して、次の新しい患者を誘い入れないと。」

「じゃあ、あいつは用済みだな。」

「ついでにあの主治医も……。」

「残念ながらそれはさせられないな。」

後ろから声がしては皆、其方を見やった。そこには笑顔で佇む青年、インセクトが立っていた。

「鴨沢だっけ？ おかげで証拠も集められた。感謝するよ。」

インセクトの手には、薬の入っていた袋が握られており、それはインセクト自身の処方箋と全て一致していた。それを見せられた医師達は虫を嘔み潰したかのような表情を浮かべた。

「それにしても、よくもやってくれたね。この病院で薬を使った人体実験を行っていたなんて。」

鴨沢と主治医は理解が追いつかなかった。何しろ、鴨沢含める患者全員は騙され、連れ去られた被害者達であり、主治医は『此処に治らない患者を集めている』と偽りの情報を聞かされて、助けたいと志願した心優しい医師であったからだ。

「言った通りだよ。鴨沢、君ははじめから病気なんでもってない健康な人だったんだ。此処に連れ去られて人体実験を受けた時に、副作用として記憶を失っていたんだらうな。こいつらの反応を見る限り、多分俺のこの体もだ。」

いつ、どう調べていたのか。もし、聞いていたのが鴨沢と主治医のみであれば、インセクトの話す内容には信憑性が大きく欠けている様に聞こえただらう。だが、医師達の焦る様子を見れば、信じるしかなかった。

「おっと！ 此処で俺たちを殺そうとしてもだめだ。警察に告発メッセージを届けるように「お仲間」に頼んだからね。」

医師達を責め立てるインセクトは、こっそり二人のみで話していたあの時のインセクトとは雰囲気異なっており、それが憎しみや嫌悪からくる態度だということは、鴨沢にも伝わった。それほどに彼らは人権をつぶされ、弄ばれていたのだから。

その後はかなり、大変だった。

医師達がインセクトを捕まえようとした時、予めインセクトが薬を回収したのだらう。病気についての事実を知った患者達の怒声や、医師の焦る声が廊下から響いた。医師達がそれに気を取られている間に、警察達が駆けつけ、無事に医師達は捕まった。

何故、警察に場所がわかったのか？と鴨沢が疑問に思っていると、警察の一人が鴨沢に教えてくれた。突然、換気のために開けていた窓から、恐らくインセクトのいう「お仲間」……無数の虫が、告発メッセージの入った封筒を運んできたらしい。そこで鴨沢やインセクト含める数十人もの元患者は保護された。

「は……？ マジかよ。君、家族いなかったのかよ。」

話を聞いていたインセクトはポトリと、食べかけだったパンの一欠片を落とす。そもそも

驚きだったのは、見た目が高校生あたりであろう、彼が成人していた事だったが。

「嗚呼、いなくなっても困らない人を中心に集めていたらしいから、俺やインセクト君を含めるほとんどの人は天涯孤独だそうだ。」

その反応に慣れているのか、鴨沢は説明を続ける。その説明を受けたインセクトは今更だが、病気にかかりやすいであろう子供がおらず、大人が多かった事に納得した。

「あ〜……あいつらのやりそうな事だな。」

「はは……それで、インセクト君はこれからどうするんだ？ 俺はあの病院に入る前と同じように、一人暮らしを続けるつもりだが……。君が良ければ一緒にこないか？」

は？ と既に何度目かの驚きと呆れの声がインセクトから漏れた。

「俺は盲目で一人暮らしに慣れてはいるが、やっぱり不都合なことが多い。それから、インセクト君もその姿だと動きにくいって話していただろう？」

「ああ、まあね……。その前になんって君は、そんな簡単に知らない人を受け入れようとするかなあ？！」

「嗚呼、それは、君は俺にとって命の恩人でもあるからだ。」

それを聞いて盛大にため息を吐きながら、苦言を溢す友達の姿に鴨沢は大きく笑った。

『一人だと大変だ。』確かにそれもある。が、鴨沢の記憶では、常に変わらない病院生活の中一つ大きく輝いていた日々があり、それがインセクトと初めて話し、共に過ごした日々であった。

「変わらない日々も良いが、少しは今までと違う日々も良いだろう？」

「……まあ、確かにそれもそうだな。じゃあ何時から君のところに行けばいいんだ？」

「嗚呼、そうだな。じゃあ……。」

終わり

作品名・変わらない日々

作者名・金沢桃夏

出版年・2022年7月28日（令和4年7月28日）

出版社・梅花女子大学 梅花 Web 出版